

## 審査員長 講評

川上 元美（デザイナー）

第3回を迎えた雪のデザイン賞は、広く全国からの応募をみるようになり、今回は372点と回数を重ねるごとに応募点数が増えることは主催者側にとって、大変喜ばしいことです。

「雪や氷のさまざまな形や現象をモチーフにする」テーマも、年を経る毎に、そのイメージの表現に新しいものを発見できることは大変楽しく、私たちもわくわくしながら、審査をむかえるものです。しかし、一方で、大変難しい判断ではありますが、毎年応募される作家も増えてくる中、その度ごとに新しい手法や思索、あるいは技術の深まりが盛り込まれており、毎回入賞している応募者があれば、前回と殆ど同じ作品であったり、ややもすれば、少しは劣るものも見受けられます。このケースでは、残念ながら高得点は得られず、より新規なものや、新鮮な応募作品に審査の目がいくのはやむを得ず、少々心苦しいところもあります。とは言え、一次通過した作品のレベルは回を重ねる毎に高くなってきていることを実感しました。

今回の第1次にデジタルデータによる応募の方式も取り入れたところ、251点がデジタルによるもので、そのうち182点がEメールによる応募でした。一次審査は、提出いただいたデータやスライドなどで審査をし、そのなかから50点を選出し、これに基づいて実物による本審査にすすむ形式は、前回と同じでした。

本審査は、今回も審査委員がそれぞれポストイットをもって、これぞ金、銀、銅賞そして奨励賞と思うものに、まず投票しました。結果、あまり票は別れず、上位3賞に関しては、1回目の投票で大勢が決まりました。あまり時を費やさずに、論議のすえ、金、銀、銅の各賞が決まりました。得票数を考慮しながら、奨励賞候補の選出に移り、この賞も得票数順に選定していきましたが、奨励賞は5点と定められていて、致し方なく、

僅差で2点が佳作にまわり、佳作賞も10点になり、論議の末8点が選出されました。

金賞は「早春」と名の付いた森政子さんの作品で、部分藍染めに白の刺し子をした半纏は、残雪の風景を表現した、感度が高く遠見にも近見にも力強く、またきめの細かな技量の伴った作品で、満場一致で選ばれました。銀賞の青木幸生さんの「雪氷の花」はガラスの塊雪氷に見立て、下部からガラスビーズのサンドショットで花柄を彫り込んだ美しい作品。

銅賞の今泉美登里さんの「Early spring」は、まさに早春の光り溢れる雪の姿を一瞬に閉じ込めたような釉薬の結晶が美しく、日常使いの器として使ってみたくなる、完成度の高い作品です。

奨励賞の各作品もいずれ劣らぬ力作で、また上位各賞ともさほど差はありませんが、類型的でない、新鮮な表現や思考のものが評価されました。

また。コンペには、いつもグラフィックの優れた作品も寄せられており、今回はCGによるアニメーションや、氷を素材にして六つの花の抽象造型を作り出す作品の佳作賞もでるなど、この「雪のデザイン賞」は他に類を見ないコンペへと広がりを見せて来て居ります。